

平成21年5月29日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2005～2008

課題番号：17300248

研究課題名（和文）：「専門的教養知」の働きとその教育・養成に関する文理総合型研究

研究課題名（英文）：

A Comprehensive Study on “Rich Culture of Specialized knowledge “
— Human and Natural—Scientific Integrated Approach to its Functions,
Education and Practical Training —

研究代表者

藤原勝紀 (FUJIWARA KATUNORI)

放送大学・京都学習センター・特任教授

研究者番号：80091388

研究成果の概要：専門家が、その専門知と人間的な生活感覚との乖離・分断をどう克服するか。すでに専門知の細分化・高度化・情報化が進むなか、その融合と専門コミュニケーションを試みる研究討議を通じて、各専門家の基盤に超専門領域的な「専門的教養知」の備えが共通して存在し、その教育・養成に共通課題として取り組む視点、学際・融合を進めるあり方と基盤形成の課題整理と考究を深め報告書を作成した。全く新しい本研究視座は、現代の広く深刻化した人間形成に関わる人間環境問題として、当初以上に重要性が示唆された。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
平成17年度	5,600,000	0	5,600,000
平成18年度	4,500,000	0	4,500,000
平成19年度	3,000,000	900,000	3,900,000
平成20年度	2,200,000	660,000	2,860,000
年度			
総計	15,300,000	1,560,000	16,860,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：(分科)科学教育・教育工学、(細目)科学教育

キーワード：(1)専門的教養知 (2)国際協力 (3)文理融合 (4)心理臨床 (5)人間知
(6)時空知 (7)生命知 (8)専門家連携

1. 研究開始当初の背景

平成2年に発生した神戸幼児連続殺害事件(酒鬼薔薇聖人事件)以来、従来とは異なる不可解な人間事象が目撃されていた。

そうした表面上は健全にみえる通常の間人が、常識的な理解を超える行動の背景としての精神構造の変化は、同年に発生した地下鉄サリン事件において、高学歴を有する成人においても生じている可能性が推測された。

高度な知識や技能と人間性の乖離に関する問題である。

それから10年以上が経過した研究開始当初において、さらなるIT化を含む社会の高度化・複雑化のなか、あるいは知識や情報と生身の人間生活との乖離が増幅されたためか、高度な先端科学・技術に関わる諸領域、人間の生命や心に関わる諸分野において、専門知に携わる者の状況認識や判断力及び道

徳や倫理に深く絡む人為ミスや不祥事が相次ぐ状況にあった。

また、こうした人為ミスや不祥事ないし事件は、更に高度化・深刻化している様相にあった。それは専門知に関わる大学人・専門家においても例外でなく、単なる倫理や業務管理といった外枠からの規制強化では限界があり、何よりも研究者・専門家自身の人間的資質に注目した取り組み視点が重要と考えられた。

それは専門知に携わる専門家の高度な教養知と考え、大学や専門家養成において、専門的な知と人間的な生活感覚との乖離現象に注目し、実態の解明と克服可能性を、斬新な視点「専門的教養知」として研究の照準において取り組む必要があった。

2. 研究の目的

高度な専門的知識・技術を適切に運用し得る専門能力の総体、日常感覚・社会常識・倫理性に根ざした超専門領域的勘・総合的眼力、自ら主体に問い、専門的知技を創造的課題発見・解決する能力の総体を「専門的教養知」と呼び、その性質と働き、効果的な教育・養成の方法について総合的に研究し、研究者並びに大学院レベルの教養教育を考究する。

このような教養教育は、大学学部レベルでの幅広い多様な専門的知識の習得という伝統的な教養教育とは照準を異にすることが推測され、そうした教育的な側面からも探求する。

3. 研究の方法

「専門的教養知」の解明・開発は、高度化し、細分化された全ての学問領域における共通課題との認識から、近年社会的関心の高い先端領域を含む切り口を勘案した「生命知」（生命倫理・環境保全）・「時空知」（社会歴史文化的課題）・「人間知」（心理臨床学的知技）の3研究部門から、実践的フィールド研究を中軸においた多様な領域にわたる第一線の専門家及び専門家を志望する大学院生を含む、超部門的・超世代的な学際シンポジウムなどを通じた新鮮で自由な討議により、全く異なる専門知に携わる専門家による相互通用性をもつ議論が可能かどうかを検証しながら、専門融合化による総合的な「専門的教養知」の輪郭のモデル化をめざし、新しい専門教育のあり方を考究し、内外に発信する。

4. 研究成果

分担研究者の各所属学会・学術誌等での研究発表及び研究論文の報告を行った。

また、多様な専門分野の連携研究者（4年度間延べ160名）とともに総合的な研究討議（ラウンドテーブルディスカッション）を毎年度実施し、以下の開催題目と討議テーマ

内容による討議記録を中心に報告書をまとめ、新たな課題を発見・提起した。

- ①邂逅：実践フィールドと専門知の個性（平成17年度 188頁）
- ②眼差：臨床実践フィールドに根ざした専門的教養知の作法を考える（平成18年度 131頁）
- ③初心：研究フィールドとしての人間環境を考える（平成18年度 162頁）
- ④素心：専門知に息吹く教養と美（平成19年度 229頁）
- ⑤縁起：専門性を生きる備えと教養（平成20年度 243頁）
- ⑥研究成果総括報告書（平成20年度 91頁）

これら報告書に集約した年度毎の総括議論には、心身医学、精神医学、小児・神経内科、口腔外科、免疫腫瘍学などの医師及び医学教育学、都市環境デザイン、深海生物学、建築家、染織工芸家、国際水資源コンサルタント、企業誌編集者、国際協力ボランティア活動家、教育社会学、メディア文化論、教育・福祉行政、学校教育、スポーツ指導者、現職教員、そしてスクールカウンセラー、心理臨床学などの文理にまたがる国内外で活躍する第一線の専門家が直接対話に参加し熱心な討議を行った。

その結果、全く専門用語が異なるにもかかわらず、相互に共通理解が促進され、同時に率直なコメント及び提言を交わすことが可能であることが共通認識された。

最近の学界でも「専門コミュニケーション」・「科学コミュニケーション」といった視点が注目されてきたが、その可能性を確認することができた。

これを可能にする専門家の共通資質として、専門知に携わる人間性に基づく専門家間の人間関係能力を共通認識するに至ったと思われ、ここに「専門的教養知」の存在が明らかにされた。

この資質は、高度で先端的な研究において必然となる研究者連携の研究実践体験、フィールド科学研究に必然となる学際連携体験を基盤に形成されることが推測され、ここに専門知と教養知の乖離を克服する可能性が考えられた。

展望としては、本研究で設定したシンポジウムのような、FDをはじめより多様なフィールド科学研究を媒介する学際的な研究者連携の場が教育研究環境としてシステム化され、その日常的な研究者間の人間関係が活性化される必要性が考えられた。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計14件)

- ①藤原勝紀、巻頭言—専門的教養知をめぐる研究を進める中で—、『専門的教養知』の働きとその教育・養成に関する文理総合型研究研究成果報告書、査読：無、2009年、11—116
- ②藤原勝紀、クライアントに生身で学ぶ面接契約の不思議、精神療法、34巻、査読：有、2008年、111—113頁
- ③藤原勝紀、パラドックスの心理臨床学、創造の臨床事例研究、5巻、査読：無、2008年、5—25
- ④遠藤利彦、アタッチメント理論の現在：特に臨床的問題との関わりにおいて、乳幼児医学・心理学研究、17巻、査読：有、2008年、24—37
- ⑤角野善弘、箱庭療法の限界と効用—風景構成法と夢分析を併用した事例から—、臨床心理学、7巻、査読：有、2007年、758—764
- ⑥藤原勝紀、臨床実践体験が息づく心理臨床研究の模索、創造の臨床事例研究、2巻、2006年、1—8
- ⑦杉本 均、シンガポールの学力政策、教育学研究、73巻、2006年、45—50
- ⑧遠藤利彦、構造方程式モデリングを賢く使うということ、パーソナリティ研究、15巻、2006年、124—128
- ⑨遠藤利彦、語りにおける自己と他者、そして時間：AAIから逆照射して見る心理学における語りの特質、心理学評論、49巻、2006年、470—491
- ⑩遠藤利彦、正当な怒りの発達、児童心理、847巻、2006年、17—22
- ⑪遠藤利彦、特集に寄せて：学際という名の正統、発達、107巻、2006年、67—70
- ⑫角野善弘、統合失調症の長期入院患者における心理療法—夢とともにいきる、臨床心理学、5巻(6)、2005年、774—783
- ⑬遠藤利彦、感情的知性をどう育むか、教育と医学、53巻(11)、2005年、18—27
- ⑭遠藤利彦、感情に潜む知られざる機能とは、科学、75巻(6)、2005年、700—706

〔学会発表〕(計2件)

- ①藤原勝紀、皆藤 章外2名、心理臨床学の輪郭—臨床実践に根ざす表現としての研究を考える—(シンポジウム)、日本心理臨床学会、2008年9月5日、つくば国際会議場
- ②遠藤利彦外4名、発達の予兆を読み・解く：社会的認知の定型・非定型発達とその発達支援をめぐる(シンポジウム)、日

本発達心理学会、2008年3月21日、大阪国際会議場

〔図書〕(計6件)

- ①藤原勝紀、皆藤 章外1名、創元社、心理臨床における臨床イメージ体験、2008年、607頁
- ②藤原勝紀、至文堂、教育心理臨床パラダイム、2007年、312頁
- ③鈴木晶子、春秋堂、イマヌエル・カントの葬列、2006年、278頁
- ④藤原勝紀、創元社、臨床心理学における研究法『レクチャー心理臨床入門』、2005年、32頁
- ⑤杉本 均外1名、学文社、現代アジアの教育計画(上巻)、2005年、201頁
- ⑥遠藤利彦、東京大学出版会、読む目・読まれる目：視線理解の進化と発達の心理学、2005年、234頁

〔産業財産権〕

- 出願状況(計0件)
無し
- 取得状況(計0件)
無し

〔その他〕

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤原 勝紀 (FUJIWARA KATUNORI)
放送大学・京都学習センター・特任教授
研究者番号：80091388

(2) 研究分担者

鈴木 晶子 (SUZUKI SHOKO)
京都大学・教育学研究科・教授
研究者番号：10231375
遠藤 利彦 (ENDO TOSHIKO)
東京大学・教育学研究科・准教授
研究者番号：90242106
皆藤 章 (KAITO AKIRA)
京都大学・教育学研究科・教授
研究者番号：70204310
角野 善宏 (KADONO YOSHIHIRO)
京都大学・教育学研究科・准教授
研究者番号：30326269
菅 佐和子 (SUGA SAWAKO)
京都大学・医学部・教授
研究者番号：10131244
杉本 均 (SUGIMOTO HITOSHI)
京都大学・教育学研究科・教授
研究者番号：50211983
齋藤 直子 (SAITOH NAOKO)
京都大学・教育学研究科・准教授
研究者番号：20334253

田川 正朋(TAGAWA MASATOMO)
京都大学・フィールド科学教育研究センター・准教授
研究者番号：20226947
梅本 信也(UMEMOTO SHINYA)
京都大学・フィールド科学教育研究センター・准教授
研究者番号：60213500

(3) 連携研究者

竹内 洋(TAKEUCHI YOH)
関西大学・文学部・教授
研究者番号：70067677
石川 充広(ISIKAWA MITUHIRO)
放送大学・高知学習センター・所長
研究者番号：70184497
白山 義久(SHIRAYAMA YOSHIHISA)
京都大学・フィールド科学教育研究センター・教授
研究者番号：60171005
細井 昌子(HOSOI MASAKO)
九州大学・大学病院・助教
研究者番号：80380400
吉田 素文(YOSHIDA MOTOHUMI)
九州大学・大学院医学研究院・教授
研究者番号：80380400
伊東 啓太郎(ITO KEITARO)
九州工業大学・工学部・准教授
研究者番号：10315161
佐藤 卓己(SATO TAKUMI)
京都大学・教育学研究科・准教授
研究者番号：80211944
田中 克(TANAKA MASARU)
京都大学・名誉教授
研究者番号：20155170
小林 茂(KOBAYASHI SHIGERU)
大阪大学・文学研究科・教授
研究者番号：30087150
松崎 佳子(MATSUZAKI YOSHIKO)
九州大学・人間環境学研究院・教授
研究者番号：30404049
増田 健太郎(MASUDA KENTARO)
九州大学・人間環境学研究院・准教授
研究者番号：70389229
岡本 正人(OKAMOTO MASATO)
武蔵野大学・薬学部・客員教授
研究者番号：10243718
鵜養 美昭(UKAI YOSHIKI)
日本女子大学・人間社会学部・教授
研究者番号：10213406
和田 竜太(WADA RYUTA)
京都大学・教育学研究科・講師
研究者番号：20402951
山川 裕樹(YAMAKAWA HIROKI)
成安造形大学・造形学部・講師
研究者番号：70367887

(以下研究協力者)

水野 彌一(MIZUNO YAICHI)
京都大学・アメリカンフットボール部・監督
高桑 三男(TAKAKUWA MITUO)
京都市・教育長
久恒 啓一(HISATSUNE KEIICHI)
多摩大学・経営情報学部・教授
西原 真弓(NISHIHARA MAYUMI)
国際教育コンサルタント
西林 幸三郎(NISHIBAYASHI KOSABURO)、
近畿小学校校長会協議会・理事長
桶谷 守(OKETANI MAMORU)
京都市・教育相談総合センター・所長
森川 泉(MORIKAWA IZUMI)
三重県教育委員会・事務局研究分野教育相談グループ・副室長
東城 久夫(TOJOU HISAO)
長野県・元小学校長
坂本 雅子(SAKAMOTO MASAKO)
福岡市・こども総合相談センター・名誉館長
辻 和毅(TSUJI KAZUKI)
地質コンサルタント
権藤 健二郎(GONDO KENJIRO)
福岡市・子ども病院・医長
斉藤 利雄(SAITO TOSHIO)
独立行政法人国立病院機構・刀根山病院・医師
山岡 章浩(YAMAOKA AKIHIRO)
九州大学・医学研究院・准教授
中尾 安次(NAKAO YASUJI)
京都市立・市立桃陽病院・院長
小西 哲郎(KONISHI TETURO)
独立行政法人国立病院機構・宇多野病院・副院長
蔭山 英順(KAGEYAMA HIDENORI)
名古屋大学・教育発達科学研究科・教授
伊藤 弥生(ITO YAYOI)
九州産業大学・国際文化学部・准教授
才藤 千津子(SAITO CHIZUKO)
同志社女子大学・現在社会学部・准教授
高山 和雄(TAKAYAMA KAZUO)
筑紫女学園・講師
廣田 崇夫(HIROTA TAKAO)
独立行政法人国際交流基金京都支部・部長
川部 哲也(KAWABE TETSUYA)
京都大学・教育学研究科・助教
片畑 真由美(KATAHATA MAYUMI)
京都大学・教育学研究科・助教
山本 岳(YAMAMOTO TAKESHI)
長岡京市・市立長岡第二中学校・教頭
中垣 ますみ(NAKAGAKI MASUMI)
京都府教育委員会・丹後教育局・指導主事
高木 直美(TAKAGI NAOMI)
株式会社サード・ステージ・代表取締役